

02・バッドエンド 「選択：外へ出る」

『01・共通ルート』から三日後。

冬のある日、十八時ごろ。

主人公、マンションから数キロほど歩いたところを、一人ふらついている。

零が姿を消してから数日。

とうとう零の不在に耐え切れなくなつた主人公は、彼女の言いつけを破つて、マンションの外へと出でしまつた。

とはいつても『あの部屋では生活するのが困難で、やむを得なかつた』というわけではない。

食事は冷蔵庫の中にいくらでも用意されていたし、水も、電気も、ガスも通常通り通つていた。

また、それらはすべて主人公が自由に使えるようになつており、主人公は『外に出られない事』『外界と連絡が取れず、情報も集められない事』以外は、普段と何も変わらない生活ができたのだ。

だが、主人公にはこれが耐えられなかつた。

外で何が起きているかわからない事、そして、そんな中零が出て行つた事が、とてもつらかったのだ。

だから主人公は約束を破り、零との関係が悪化する事よりも、思うまま行動する道を選んだ。

零を信じる事よりも、『不安でじつとしているから』という、己の感情を優先してしまったのだ。

だが、『不安でじつとしているから』結果、主人公が目にしたものは、想像を絶していた。

三十分も歩く頃には、零が『部屋から出るな』と言った理由も、骨身に染みてわかつてくる。

今からでもマンションに戻るべきだろうか。おそらくそれが正しいのだろう。
だが、もう遅い気がする。

今になつて零の真意を理解したところで、すべてはもう、手遅れに思えた。

なぜなら……。

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0—5秒ほど流してSE2】

【その後、小さな音量でトランク終了まで流し続ける】

SE2 雪の足音01

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【穏やかに。これまで通りの調子で。

『帰宅したが、主人公がリビングに居なかつたので探した。すると、自室にいた』
というくらいの様子で】

ああ。ここに居たんだね』

ん、ああ。ここに居たん』

するとそこへ、背後から雪が声をかけてきた。

主人公はその声を聞いた瞬間『姿を消す前と、何も変わっていない』と思つた。

優しい声音にむしろ安心し、自分が約束を破つた事も忘れて、再会の喜びに涙ぐんだ。

〈主人公〉

「雪……！」

だが、期待を持つて振り向いた時、それは間違いであつた事を理解する。

雪はこれまで通り、静かな雰囲気をたたえていた。

だがそこには、冷たい怒りが滲んでいるように見える。

「穏やかに。これまで通りの調子で。

『リビングから自室に移動するなら、リビングの電気は消しておいてほしい』
と、たしなめるくらいの様子で】

言つたよね。部屋の中に居てつて。

言つたやんな。部屋ん中に居てつて。

【『主人公が節電に協力しないから、電気代が上がつちやつたつて、この前説明したでしょ
う』とでも言うような調子で】

もうわかると思うけど。この世界、もうダメなの。
もう分かる思うけど。この世界、もうダメやねん。

【『二人暮らしなんだから、お互に気を付けて、光熱費を節約しようよ』

とでも言うような調子で】

私とあなたしか居ないの。

うちとあんたしか居らん。

【『でも節電の件は、あんまりしつこく言うと嫌だろうから、言わないようにしてたのに』
とでも言うような調子で】

でも、そうなつたら、あなたは嫌だろうって思つたから。
けど、そうなると、あんた嫌やろ思うたから。

【『私だけが気を付けてるって、何だか変じやない?』

とでも言うように、少しずねるように、ほんの少しだけ怒つて】

私は、何とかしたいつて思つて。

うち、何とかせな思つて。

【ここでトーンが変わる。

『すごく残念だ』という感じで】

今回も……】

今回も……】

しばしの沈黙。

「トーンが先ほどまでに戻る。『少しがつかりしている』程度の声音で。

『もうこれ以上、節電の件で怒りたくないよ』とでも言うような感じで】
なのに……何で外出たの？

やのに……何で外でたん？

何で私の事、信じてくれなかつたの？」

なんでうちの事、信じてくれへんかつたん？」

しばしの沈黙。

主人公は、言葉を発する事すらできずにいる。

「【ぼそっと。さほど怒つていなかのように。

『なんで何回言つても忘れちゃうかなあ』程度の怒りしかなかないかのように】

悪い脚。

【『こうなつたら、今度電気消し忘れたら、罰金とかにしようか』

という位の提案をしているかのよう】

こうなつたら、もう二度と、外に出たいなんて思わないようにしないとね。

こおなつたら、もう二度と、外出たいなんて思わんようにしないとあかんな。

『私一人で家計の事気を付けてるの、疲れちやつた。

そもそも節約頑張つての、二人で旅行に行くためじやん。

別に私は、お金たまらなくて、旅行行けなくなつてもそれでいいけど?』

くらいの落胆

私も、もう頑張るの疲れちやつた。

私も、もう頑張るん疲れたわ。

私達二人で暮らすだけだつたら、あれもこれも、殺す必要ないし。

うちら二人で暮らすんやつたら、あれもこれも、殺す必要ないし。

このままでも、私はそれでいいよ』

このままでも、うちそれでいいで』

△主人公△

「……零。ごめん。私が間違つてた。

全部私がいけなかつた。お願ひ。謝るから。だから……」

主人公達以外のすべての生き物が消えうせた街で、悲痛な謝罪の声が聞こえる。もはやそれを聞く者はいないが、もしいたとしたら、とても二人の関係を『友人』だと

は思わないだろう。

主人公の声は震え、怯え、今にも泣きだしそうだ。

これ以上の醜態をさらすのも、もはや時間の問題だろう。

主人公はただただ、零が恐ろしかった。

傷だらけで、血まみれで。無感情な目で自分を見下ろす零が。

そんな彼女が次に狙うのは、自分に違いない。

そう思い込んでしまうほど、今の零は恐ろしかったのである。

「主人公の言葉を完全に無視して。

ここから最後のセリフまでトーンが変わる。まずは※マークまでゆつくりと、『すぐく
残念だ』という感じで】

だつて怖いもん。
だつて怖いもん。

世界が元に戻つたら、あなたが他の子の所へ行きそうで。
世界が元に戻つたら、あんた他の子んとこ行きそうで。

だつて嘘つきだもん。あなた。
やつて嘘つきやもん。あんた。
浮氣されたら嫌だよ。私」※

浮氣された嫌やで。私

SE3 霊の足音02

【最初から最後まで流す】

【さらにだんだん近づいてくる】

だが、先に『怖い』と口にしたのは霊の方だった。
一体、今更何を恐れるというのだろう。

これだけ主人公を肉体的にも精神的にも支配して、どこに恐怖があるのだろう。
主人公はそう思つたが……。

霊はただ静かに主人公に近づき、また、左耳にささやいた。

「次の※マークまで、すべて『左耳にささやく』。
また、一言一言、ゆつくりめに、はつきり話す」

だから。

やから。

帰ろう。

帰る。

【ひとりわゆつくりと】

ずっと。

ずっと。

【少し間をあけてから】

二人で。あの部屋に居よう。

二人で。あの部屋に居ろう。

【特に静かに、はつきりと念を押す】

ね？」

な？」

〈主人公〉

「……はは。はは。あはは……」

すぐそばに零の吐息を感じながら、主人公は無感動に笑い、ぼんやりと空を見上げる。

『多分、自分が外へ出て、直接外の景色を見るのはこれが最後だろう』

そう思ったからだ。

だが、冬の空はすでに暗い。おまけにこの惨状だ。外には灯りすらまばらである。
だから、目を凝らしても……。

もう、ほとんど何も見えなかつた。
ここでフェードアウトして終了。